

位置と環境

遺跡は吾平町の中心部から南へ1 kmで、ともに肝属川の支流である始良川と大始良川によって東西から侵食された広大なシラス台地の西端に位置し、その標高は約50mである。

この台地上には、和田遺跡、諏訪尾遺跡、四方高迫遺跡や中尾地下式横穴墓群など古墳時代を中心とする遺跡が数多く存在している。また、南へ2 kmの地点には、神代の三山陵のひとつである吾平山上陵があり、人々の信仰を集めている。

調査の経緯

県道神野折生野吾平線改良工事に伴って、鹿児島県教育委員会により、平成3年度（1991年）から8次にわたる発掘調査が行われてきた。また、吾平町教育委員会が、県教育委員会の協力を得て、その周辺の発掘調査が数回行われている。

発掘調査の結果、中尾遺跡は古墳時代の集落跡が中心であり、集落の南側には当時の墓地と考えられる中尾地下式横穴墓群も存在していることが判明した。

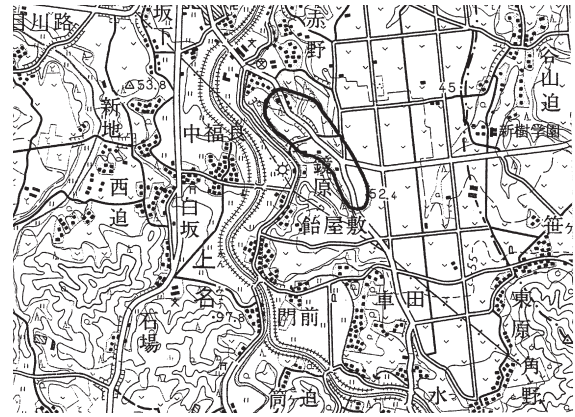
遺構と遺物

遺跡の中心となるのは、台地北西端部の集落跡である（写真1）。現在までの発掘調査の結果では、確認されただけで、約40軒ほどの竪穴住居跡とその集落を取り囲むと思われる数本の溝状の遺構が検出されている。

竪穴住居跡（写真3）は、基本的に一辺3～4 m程度の方形で、その中からは日常生活に用いられていたと思われる甕形土器、壺形土器などが出土している。また、溝状遺構からは、使用後に廃棄された大量の土器が出土している。中でも、注目されるのが住居跡から出土した甕（写真6の右側）と溝状遺構から出土した鉄製の鈴（写真4）である。

甕は、穀物を蒸す蒸し器であり、形状は口径約30 cm、高さ約35 cm程度で甕形土器の底部を開口させたものである。従来南九州において、穀物を蒸すという調理方法はあったであろうと考えられていたが、住居跡からの出土により実証されたものである。

鈴は、直径約4 cmの球形で蛍光X線分析の結果、



第1図 中尾遺跡の位置

鉄製の鈴であることが判明した。県内における鈴の出土は、現在までのところ指宿市、前述の中尾地下式横穴墓と中尾遺跡の3例である。素材については、先の2例は青銅製である。中尾遺跡のものと形状のよく似たものは、滋賀県横尾山古墳より2個発見されており、その年代は7世紀とされている。

出土した鈴は、錆を取り除いた結果、古墳時代の響きを今に伝えてくれるような音色を取り戻した。

集落から数百m南側の地下式横穴墓群からは、現在までの調査で7基の地下式横穴墓が確認されている。これらの横穴墓からは、馬具及び馬鈴や円頭大刀など県内では出土例のまれなものが多く発見されており、それらはいづれも畿内地方の影響を強く受けたものであると考えられている。

特徴

鹿児島県内において、古墳時代の集落跡と当時の墓地がセットで発見された例はまれであり、鹿児島県内における古墳時代の集落及び墓制を知る上で極めて重要な遺跡である。その上、出土した遺物の中には、県内では出土例が極めてまれなものが多く、その出自を明らかにすることにより、当時の交易や交流を知る上で重要な資料となるものと言える。

資料の所在

出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターと吾平町教育委員会に保管されている。

参考文献

鹿児島県立埋蔵文化財センター2005「中尾遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』



写真1 中尾遺跡の全景



写真2 土器の出土状況

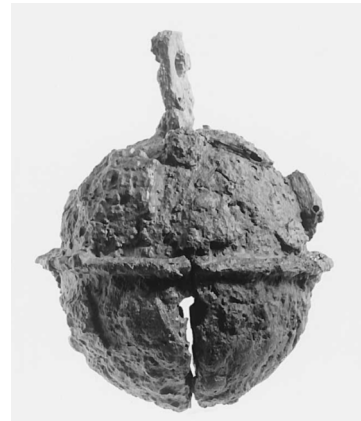


写真4 鈴



写真3 竪穴住居跡

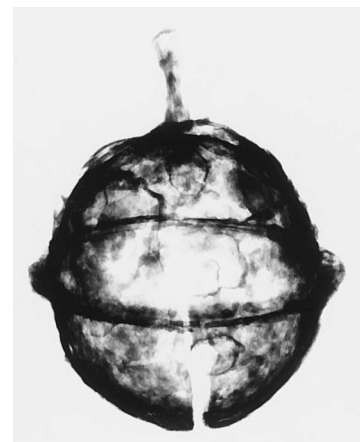


写真5 鈴のX線写真



写真6 出土した土器